Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-05-04

明治後期における『少女世界』にみる良妻賢母規範をめぐるポリティクス : 〈お伽小説〉と〈冒険小説〉を事例として

目黒, 強

(Citation)
神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要,11(1):95-104

(Issue Date)
2017-09-30

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81010026

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010026

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要
第11巻第１号　2017

研究報告

明治後期における『少女世界』にみる良妻賢母規範をめぐるポリティクス
―〈お伽小説〉と〈冒険小説〉を事例として―

The Politics on the Norm of Dutiful Wife and Devoted Mother in the Late Meiji Era: Focusing on “Otogi-Shosetsu” (Fairy Novel) and “Boken-Shosetsu” (Adventure Novel) in *Shojo Sekai*

目黒　強*
Tsuyoshi MEGURO

要約：本稿では、明治期を代表する少女小説である『少女世界』に掲載された〈お伽小説〉と〈冒険小説〉を取り上げ、良妻賢母規範の観点から「冒険少女」の描かれ方を分析した。その結果、①〈お伽小説〉と〈冒険小説〉における「冒険」の語られ方が異なること、②良妻賢母規範を遵守するタイプと学習するタイプの作品が多数を占めていること、③良妻賢母規範との緊張関係が認められる作品が少数ながら掲載されていること、④③のような緊張関係は「冒険少女」そのものに内在するものであり、「意図せざる結果」である可能性が示唆されること、⑤③のような作品でも、「冒険少女」は同伴男性により語られる客体として制御されていたこと、が明らかとなった。以上のことから、『少女世界』は、良妻賢母規範を再生産する雑誌でありつつも、編集者や作家の意図を超えて良妻賢母規範から逸脱する潜在性を孕んだ雑誌であったといえる。

１．問題の所在

日本で最初の少女雑誌とされる『少女界』（金港堂）が明治35年４月に創刊されたのを皮切りに、明治39年９月には『少女世界』（博文館）、明治41年２月には『少女の友』（実業之日本社）が刊行された。その背景的要因として、明治32年２月に高等女学校令が公布されたことに伴う女学生数の増加が挙げられる。

なかでも、『少女世界』は、明治40年代の女学生によく読まれていた。「現代の女学生（十一）」（『東京朝日新聞』明治44年４月９日）によれば、女学校で最も読まれている雑誌が『少女世界』であったという[1)]。

ここで着目したいのは、高等女学校令が公布され、女子教育の機運が高まるにつれ、女学生の課外読み物を規制する動きが認められた点である。高等女学校令の公布後、まもなくして開催された「高等女学校長協議会」では、「高等女学校生徒の小説を読むを禁ずるの件」が議案に上っている（「高等女学校長協議会議案」『読売新聞』明治32年５月９日）。

少女向けの課外読み物が規制された理由は、谷紀三郎「雑誌を読む少女」（『少女世界』７巻13号、大正１年10月）からうかがい知ることができる。

> そうして又雑誌を読む少女は、妙に沈み勝ちになる、空想をのみ夢みて、実際じみたことを嫌ふ。感情が鋭敏になつて、直きにむつとしたり、直きに泣いたりする。裁縫なぞは嫌ひになつて本を読みたがる。何か頻りに書く。どうかすると暗い庭に一人で立つて居たりする。（下線部は引用者による。以下、同じ）

「裁縫なぞは嫌ひになつて本を読みたがる」と指摘されているように、課外読み物は良妻賢母規範からの逸脱を促すメディアとして警戒されていたのである[2)]。

そこで、本稿では、明治期を代表する少女雑誌である『少女世界』において、課外読み物規制を作動させるトリガーである良妻賢母規範がどのように描かれているのかを明らかにすることとした。検討期間は、『少女世界』が創刊された明治39年から、課外読み物規制が制度的完成をみる明治末年までとした[3)]。巻数に換算すると、１巻から７巻までが対象となる。

具体的には、当該期間に掲載された〈お伽小説〉と〈冒険小説〉における「冒険少女」を分析する。「冒険少女」は、『少女世界』における角書およびタイトルを参照した造語で、家庭領域外で事件に遭遇する少女を指すものとする。

まずは、「冒険少女」に着目した理由であるが、「冒険少女」は家庭領域外で活動する点において良妻賢母規範から逸脱するモーメントを孕んでおり、課外読み物規制との緊張関係を明らかにできると考えたからである。

次に、〈お伽小説〉と〈冒険小説〉を検討する理由であるが、「冒険少女」の登場が期待できるジャンルだからである。〈冒険小説〉に「冒険少女」が登場することについては説明は不要であろうが、〈お伽小説〉については説明を要する。後述するように、

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授

（2017年３月31日　受付
2017年３月31日　受理）

〈お伽小説〉を少なからず手がけた巖谷小波の作品は「冒険お伽小説」とでも呼ぶべき内容を有しており、〈お伽小説〉は〈冒険小説〉の隣接ジャンルであったからだ（目黒, 2010）。

少女雑誌における良妻賢母規範に関する研究としては、今田（2007）が優れているが、他の少女雑誌研究と同じく、「少女小説」を中心とした検討に止まっている。少年少女雑誌における「冒険少女」に関する研究はほとんど見受けられない訳だが、久米（2013）が『少年世界』（博文館、明治28年創刊）における「外出失敗物語」と『少女世界』における「少女冒険小説」を検討するなかで、蔡（2010）が『少年世界』と『少女世界』における「異界往還物語」を検討するなかで、「冒険少女」を分析している。しかしながら、前者では〈お伽小説〉が検討されておらず、後者では「冒険小説」などの角書を含む作品を「お伽小説」として検討しているため、ジャンル間の差異を扱えていない。

つづいて、作品の抽出方法であるが、原則として、角書に「お伽小説」と「冒険小説」という語が含まれる作品を検討することとした（「少女お伽小説」のようなケースもあることから、総称としてジャンル名を表記する場合は〈　〉で括っている）。角書に着目したのは、読者が作品を理解したり、作品が社会に流通したりする際のコードとして機能していると考えたからである。もちろん、以上の抽出方法では、「冒険少女」が登場するものの、角書が冠されていなかったり、異なる角書が冠されていたりする作品を検討できないため、作品を補うなどのフォローが要される。しかしながら、作品の選定手続きが明示されることが少ない少年少女雑誌研究にあっては、角書に着目する方法は、抽出手続きの恣意性を少なくできることに加え、当時のラベリングを損なわない点で優れていると考える。

2．巖谷小波と沼田笠峰の良妻賢母観

本節では、作品の分析に先立って、巖谷小波と沼田笠峰の良妻賢母観を検討する。両者に着目したのは、『少女世界』の編集方針に影響力のある作家だからである。

まずは、良妻賢母思想について確認しておく。小山（1991）によれば、良妻賢母思想は「明治啓蒙期における賢母論にその端を発し、日清戦後の女子教育論の隆盛、高等女学校令の公布という状況の中で、国家公認の女子教育理念としての地位を確立した女性観」であり（51～53頁）、「「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業に即した形での、期待される女性像の成立であるとともに、女が家事・育児を通して国家へと動員されていく、女に対する国民統合のありようを示すものであった」（93頁）。ただし、明治後半期においては、「裁縫に代表される単なる家事能力や、従順さなどの婦徳を身につけた女性に対する期待感が高く、思想と現実との間にはズレが存在していた」という（235頁）。以上の乖離は、『少女世界』にも顕在化していると考えられる。

それでは、次に、巖谷小波の良妻賢母観を明らかにする。『少女世界』創刊当初の主筆であった海賀変哲を監督した小波は「愛の光」（『少女世界』１巻３号、明治39年11月）で、次のような良妻賢母観を述べている。

> 成る程御婦人だからと云つて、是からの社会に立つには、男子に譲つてばかりは居られません。それは時と場合によつては、男子と競争もしなければなりません。――はやい話が、男子が学問すれば、女子も学問をし、男の学校に運動会があれば、女の学校にも運動会があります。そう云ふ風に、男の出来ることは、また女にも出来ない事はありませんが、只その間に、何時も分を忘れない様、即ち自分は女であると云ふ事を、飽くまでも覚えて居ていたゞき度いのです。／さてその分を忘れないと云ふ事。即ち女らしくすると云ふ事は、私に云はせると、取りも直さず、愛を持つと云ふ事です。（略）但し茲に愛と云つても、無理に愛嬌を見せたり、腹にも無いお世辞を云ふ事ではありません。愛は人情の最も高尚なもの、即ち同情と云ふ意に過ぎません。

前半では、女子に男子と同等の権利を認めている。さらに、「所で我々日本人にわ、その自己を欺く事と、意志の弱いと云ふ事が、兎角通有の欠点であるらしく、殊に婦人の側に於て更にその著しい観があります」（「サヽラナミ」『少女世界』４巻11号、明治42年８月）のように、小波は女性に「意志」を貫く強さを求めている。しかしながら、後半では、女性であるという「分」を忘れないこと、「同情」という婦徳を持つことを求めていた。

次に、1907年から主筆を務めた沼田笠峰の良妻賢母観を明らかにする。笠峰は『現代少女とその教育』（同文館、大正５年）で、次のような見解を示していた[4)]。

> 頑固な頭脳をもつた一部の人々は女子に対して常に一種の僻見を抱いて居る。即ち、女子は到底男子に隷属すべき下等のもの〔、〕女子は何処までもおとなしくして、消極的であるべきものといふ先入思想に支配されて居る。斯ういふ論者によつて偏狭な良妻賢母説が唱へられたり、女子の天地は台所と子供部屋とである、といふ侮蔑の意見が発表されたりするのである。（略）男子は男子としての特徴や任務があるし、女子はまだ女子としての長所や天職があるのだから、男女を同じ標準に照らして比較することそれ自身が、すでに間違つた発足点ではあるまいかと思ふのである。（249～250頁）

「偏狭な良妻賢母説」を批判しつつも、「女子はまだ女子としての長所や天職がある」という留保を加えている点は小波と同じである。

当時の少女に期待されていた婦徳については、小波と笠峰らが編者をつとめた『明治少女節用』（博文館、明治40年）で知ることができる[5)]。

同書では、「少女心得」として、「少女と愛情」「君には忠、親には孝」「友だち」「信義」「交際」「自信」「従順」「優美」「清潔」「勇気」「学問技藝」「勤勉」「倹約」「金銭」「博愛」「生き物」「公園の花」「規律」の婦徳が取り立てられている。全体を貫いているのは、「清く温かな愛情」であった。

ここで注目されるのは、「勇気」が取り上げられていた点である。

> 女子は、概して家の中にあつて、やさしい仕事に従うて居るものでありますから、勇気は無くともよい、と思ふ人がある

かも知れませんが、これは大なる誤りです。たとへ、かよわい女の身でも、心はシツカリとして、いかなる大敵に出会つても、ビクともせぬように、剛毅の気性と勇気の精神とを、養つておかねばなりません。(11頁)

以上の検討から、『少女世界』を牽引した小波と笠峰は、「偏狭な良妻賢母説」に対して批判的であり、少女に「意志」の強さや「勇気」を求めながらも、女性であるという「分」を超えないことを求めている点で、良妻賢母規範をめぐってダブルスタンダード的な立場を採っていたことが明らかとなった。

3．〈お伽小説〉における「冒険少女」の分析

（1）〈お伽小説〉の掲載状況とその特徴

角書に「お伽小説」という語を含む作品は、【表1】の通りであった[6]。

【表1】『少女世界』における〈お伽小説〉作品一覧（1906～1912）

連載開始	連載終了	作品名	作家名	連載
3巻1号	3巻8号	みどり艸紙	小波	6回
3巻10号	3巻16号	天の橋姫	小波	6回
4巻1号	4巻3号	六の花片	小波	2回
4巻4号	―	はげ人形＊	小波	1回
4巻5号	4巻7号	八重一重	小波	2回
4巻8号	4巻9号	雁の礫	小波	2回
4巻8号	4巻11号	無縫の衣	久留島武彦	3回
4巻11号	4巻16号	火借の森	小波	5回
5巻1号	5巻5号	怪牡丹	巌谷小波	4回
5巻7号	5巻16号	鶯塚	さゞなみ	8回
6巻15号	―	雨降姫	佐倉桃子	1回
7巻9号	7巻16号	落花の巌	小波	6回

＊欠損のため、『小波お伽全集第八巻』（千里閣、昭和5年）に拠った。

まずは、掲載状況であるが、掲載件数は46件、作品数にして12作品を数えた。巌谷小波の作品が12作品のうち10作品を占めており、『少女世界』における〈お伽小説〉は小波によって牽引されていたといえる。

次に、スタイルの特徴であるが、ロマンス（romance）の要素が強いことが挙げられる。坪内逍遥『小説神髄』（松月堂、明治18～19年）によれば、ロマンスは次のようなスタイルを指す。

ローマンスは趣向を荒唐無稽の事物に取りて、奇怪の百出もて篇をなし、尋常世界に見はれたる事物の道理に矛盾するを敢て顧みざるものにぞある。小説すなはちノベルに至りては之れと異なり。世の人情と風俗をば写すを以て主脳となし、平常世間にあるべきやうなる事柄をもて材料として而して趣向を設くるものなり。(27頁)[7]

ノベル（novel）と対比されているように、ロマンスは非リアリズムを特色としていた。

作品の内容については次項に譲るが、全ての作品で伝奇的設定が認められた。なかでも、注目されるのは、「雨降姫」を除き、動植物や神霊が擬人化されていた点である。

このようなスタイルは、小波の〈お伽噺〉に由来する。木村小舟『少年文学史明治篇別巻』（童話春秋社、昭和18年）によれば、小波の〈お伽噺〉は「動植物及び無機物界の万象を主客として取扱へる」点にあるという（249頁）。小波自身も「本来お伽噺なるものわ、どれも多少の怪奇気分を含まぬのわ無い」と述べている（巌谷小波『小波お伽全集』1巻、千里閣、昭和3年、6頁）。「尋常世界に見はれたる事物の道理に矛盾する」小波の〈お伽噺〉は、ロマンスであったのである。

さらに、小舟によれば、『少年世界』に掲載された小波の〈お伽小説〉は「冒険お伽小説」を志向していたという（木村小舟編『明治のお伽噺』上巻、小学館、昭和19年）。

而して此の四篇のお伽小説を通じて、明らかに認識し得られる一事は、作者の思想が、漸次勇壮なる冒険お伽小説の領域に進みつつあることにて、正しく時代の風尚を茲に看取せられる。(57～58頁)。

『少女世界』に掲載された〈お伽小説〉においても同様で、伝奇的設定のもとで少女が冒険を繰り広げていた。

（2）〈お伽小説〉における「冒険少女」の分析

ここでは、良妻賢母規範の観点から「冒険少女」を分析する。ただし、少女が家庭領域外で冒険しない「はげ人形」、少女以外が主人公である「みどり艸紙」と「雁の礫」については、分析対象から除外した[8]。

「冒険少女」が良妻賢母規範に示す振る舞いとしては、次の四通りが想定される。第一類型は規範を遵守するタイプ、第二類型は規範を違反するタイプ、第三類型は規範を学習するタイプ、第四類型は規範から自由なタイプである。

以上の類型に基づき分類したところ、遵守型が3作品（「六の花片」・「八重一重」・「怪牡丹」）、違反型が0作品、学習型が5作品（「天の橋姫」・「無縫の衣」・「鶯塚」・「雨降姫」・「落花の巌」）、自由型が1作品（「火借の森」）という結果となった。

①遵守型

まずは、「六の花片」であるが、「村で評判の孝行娘」の「お松」が「山姫」によって心根を試され、試練を乗り越えるという物語である。「孝行娘」であることに対する褒美として、母親の病気を治してもらい、金貨を得ている。婦徳に重点を置いているためか、試練の内容が花片を届けるだけで、冒険的展開に乏しい作品であった。

次に、「八重一重」であるが、「ひとえ」という子櫻の精が自分らしい着物を得るまでを描いた物語である。手あたり次第、目の前の衣を羽織った「やえ」が暑さに中てられるという結末と相俟って、身に付けるべき婦徳として裁縫が強調されていた。

この作品で注目されるのは、「自分で衣服に織れと云う、神様の御意に相違あるまい」と考えた「ひとえ」が探検しながら自ら衣服を拵える点である。

けれども元より織り度い一心。無ければ自分で拵えるまでだ

と、ひとえわやがて本堂の裏の、森に入つて行き、あれかこれかと見立てた揚句、古い榎の枝で、巧みに道具をこしらえ、これに以前の糸をかけて、トントンハタリ、トンハタリと、これから機を織り始めました。（４巻７号、明治42年５月）

機織り機まで製作してしまう「ひとえ」は、良妻賢母規範の圏域に身を置きながらも、知恵を働かせて行動する「冒険少女」であるといえる。

最後に、「怪牡丹」であるが、「薫」という少女が天神様の遣いと思しき「稚児様」のアドバイスにより、友達の「雪枝」に憑りついた「怪牡丹」を祓うという物語である。

薫はギヨツとしながらも、元より友達思いですから、何で今更逡巡いましよう。いきなり其所え走りよつて、牡丹の花を取るが早いが、畳の上え投げつけて、代りに今拾つて来た、梅の花と寒菊とを、花瓶の中え活けました。（５巻５号、明治43年４月）

引用箇所は、薫が「怪牡丹」を祓う場面である。勇敢な少女として描かれる一方、「雪枝」に邪険に扱われても、愛想を尽かすことない、「友達思い」の一面がクローズアップされていた。「友達」のための行為であること、有事の際には「勇気」が認められていたことを踏まえるならば、良妻賢母規範に則った行為であるといえよう。

なお、「少しも我儘な所わ無く、よく孝行する」（５巻１号、明治43年１月）とあるように、「雪枝」は良妻賢母規範を遵守している少女である。にもかかわらず、「怪牡丹」に憑依されたのは病弱であったからであると思われる。健康は産む性としての要件であり、病弱であることは良妻賢母規範からの逸脱を意味するからだ。

②学習型

「無縫の衣」は、裁縫が苦手な「高等女学校」の「女学生」である「お縫」が母親から課された着物を「水姫」に仕立ててもらったところ、呪いを受けるという物語である。

「水姫」と出会った川に飛び込むことで裁縫の型を会得し「呪い」が解除されるのだが、「母さま、あゝ嬉しい、あたしは是でやつと女になりましたねえ。」（４巻11号、明治42年８月）からもうかがえるように、裁縫が女性の嗜みとして強迫的なまでに身体化されていた。「八重一重」の「ひとえ」とは対照的に、婦徳に絡めとられた「冒険少女」であるといえる[9]。

なお、「お縫」が厳しく罰せられたのは、彼女が「女学生」であったからだと思われる。当時の「女学生」批判には、裁縫嫌いであることが槍玉に挙げられていたからである[10]。

「天の橋姫」は「外出失敗物語」の典型であった。「外出失敗物語」とは、久米（2013）が『少年世界』に指摘した傾向で、親の言いつけを守らずに外出するなど、少女が「家の娘」から逸脱するような外出をした場合、失敗に終わり、往々にして罰せられる物語を指す。

この作品は、「容貌好し」で「根が我儘」な「人魚」の娘である「小安手」が宝玉欲しさに家出し、自らの行為により、父親を失いそうになり、改心するという物語である[11]。家出は失敗に終わり、親不孝の罰として「天の橋姫」として「月姫」に仕えさせられるなど、親孝行の尊さを学ぶ教訓物語となっていた。

「外出失敗物語」のバリエーションとしては、「雨降姫」と「落花の巌」が挙げられる。

「雨降姫」は、生まれつき涙が出ない華族の娘である「美奈子」が「涙の出ない女が、此世の中にあるものぢやない」と言われ、我が身を恥じ、家を出るという物語である。

「爺や、私は決してそんなもん（狐狸、引用者注）ぢやアない、実は私は産れると雨が私を避けて降るばかりか、いくら泣かうと思つても泣けず、またいくら涙を零さうと思つても涙が出ない、それで御両親は不吉だと云つてお嘆きになるもんだから、今夜お邸を窃と脱出して来たんだけれども、行く處はなし、お腹は減るし、困つてしまつてかうしてこんな處に立つて居たんだよ！」（６巻15号、明治44年11月）

紆余曲折を経て、両親に再会した際、涙が零れ落ちたことにより、娘として再び迎え入れられるが、「家の娘」であるためには女らしくなければならないという教訓がうかがえる。涙が出ないのは生得的なものであるため、良妻賢母規範に違反した訳ではないが、「情」を獲得するまでが描かれていたことにより、学習型にカウントした。

「落花の巌」は、上京しようとしている「お清」という少女が同じ願いを持ちながら志半ばにして落命した「小百合姫」に諭され、上京のための家出を断念する物語である。家出が未然に防がれているが、家出の末路が「地獄」として表象されており、家出の失敗が暗示されていた。

「なるほどお前が田舎を出て、都で修行したいと言ふのは、無理もない志望だけれど、それは私（小百合姫、引用者注）も覚のあることで言はゞ只都と言ふ聞いた極楽に憧がれての事。まのあたり行つて見たら却つて地獄へも引落さうと云ふ、悪魔の手に充ちて居るのだ。……そんな危険所へ行くより、浮いた志望はこの川水に、むしろ流すか沈めるかして、その代りには清らかな、瀬を行く舟の便りを得て、私やまたお前の様に、おなじ迷に入らうとする、不憫な世間の乙女達を、何卒救うて貰ひ度い」（７巻12号、大正１年８月）

「小百合姫」は、上京熱に浮かされた虚栄心を「冷却」[12]する規範そのものである。「小百合姫」に導かれ、名前の通り、「清らかさ」を学んだ「お清」は、良妻賢母規範に回収されることになる。

「鶯塚」は、従姉の「藤子」に意地悪をした「毬子」が改心し、鶯の少女たちの助力により、時鳥の少年たちに攫われた従姉と母親を救出という物語である。従姉に意地悪をしたことにより、母親を攫われるという因果応報譚となっていた。改心した姿が描かれていることから、従姉に対する「同情」を学習する物語であるといえる。

此上わ仕方が無い。いつそ命を投げ出して、この戦争を止めてからの事と、覚悟を極めると勇気も出ます。今しも双方入り乱れ、鎬を削る修羅場の中え、思い切つて飛び込みました。（５巻16号、明治43年12月）

引用箇所は、鶯の少女たちと時鳥の少年たちの争いを止めようと決心する場面である。「毬子」は「勇気」のある「冒険少女」として造形されているが、後述するように、「沈着」が求められることを踏まえるならば、衝動的な一面はマイナスかも知れない。

③自由型

「火借の森」は、「露子」という少女が「お照」という豪胆な少女と出会い、魔物が棲むという迷信のある森を二人で探検し、魔物に封じられていた「月姫」を解放するという物語である。

「それでもあの森には、誰も恐がつて入らないが、考えて見ると馬鹿馬鹿しい話だから、何時か一度わ探検に行つて、私達の様な女の子でも斯うして行けば行かれると云ふ事を村の人達に知らし度いと思つてたのけれども一人で行つたんぢやア、後で證人になるものが無いから、人が信用してくれないし、と云つて、尋常の者ぢやア恐がつて、誰も一所に行こうつて云わないから、それで今日までわ、誰にも話さず独りで考えて、気の強いお友達の出来るのを、内證で探して居たんだが、(略)」（４巻13号、明治42年10月）

まずは、迷信に惑わされず、森を探検する点が注目される。沼田笠峰が「迷信と冒険」について「危険と知りつつ、わざとそれに近寄るのは、もとより慎しむべきことですけれど、徒らに迷信に左右されるのも、あまり褒めたことではあるまい」と述べているように（「少女雑感十題」『少女世界』６巻14号、明治44年11月）、迷信に惑わされない「冒険少女」が『少女世界』では許容されていたからである。

次に、注目されるのは、「私達の様な女の子でも斯うして行けば行かれると云ふ事を村の人達に知らし度い」からもうかがえるように、性別役割分業規範から自由な点である[13]。

特筆すべきは、二人とも母親の言いつけを守らず、森を探検していた点であろう。久米（2013）によれば、親の言いつけに背く少女は悲惨な結末を迎えることが少なくないからである[14]。

たとえば、北田うすらひ「達磨さん」（『少年世界』２巻12号、明治29年10月）では、「お転婆」をして「父様や母様の言ふ事を肯かなかつたばつかり」に足に障害を抱え、「晴れて世間へは、終身出られないやうに」なった少女が描かれていた。「火借の森」では、罰せられるどころか、金の鉱脈を探り当てるというオチまであり、「達磨さん」とは対照的な結末となっていた。

４．〈冒険小説〉における「冒険少女」の分析

（１）〈冒険小説〉の掲載状況とその特徴

【表２】は、角書に「冒険小説」ないしは「探検小説」という語を含む作品に[15]、「冒険少女」という角書が冠されていた「無人島の正月」と「花傘紅筆」、角書はないものの、タイトルから冒険小説であることがわかる「少女冒険譚」と「漂流少女」を加えた〈冒険小説〉の一覧である。

【表２】『少女世界』における〈冒険小説〉作品一覧（1906～1912）

連載開始	連載終了	作品名	作家名	連載
１巻２号	１巻４号	少女冒険譚	春浪漁史	3回
２巻３号	２巻12号	女侠姫	押川春浪	8回
２巻13号	２巻16号	三人姫君	押川春浪	3回
３巻１号	―	無人島の正月	江見水蔭	1回
３巻５号	３巻７号	花傘紅筆	黒川青泉	2回
３巻７号	３巻13号	黒百合姉妹	鳴海濤蔭	6回
３巻10号	３巻16号	露子の冒険	押川春浪	6回
３巻８号	３巻15号	海底の女王	江見水蔭	6回
４巻３号	５巻９号	腕環の行衛	押川春浪	8回
５巻４号	５巻７号	漂流少女	江見水蔭	3回
６巻12号	―	桃子嬢	押川春浪	1回
６巻13号	７巻７号	人形の奇遇	押川春浪	8回

まずは、掲載状況であるが、掲載件数は55件、作品数にして12作品を数えた。押川春浪の作品が12作品のうち７作品、江見水蔭が３作品を占めており、『少女世界』における〈冒険小説〉は春浪と水蔭によって牽引されていたといえる[16]。

次に、スタイルの特徴であるが、ロマンスとノベルの中間に位置付けられる[17]。

冒険小説作家として人気を博していた春浪は、自著『伝奇小説　銀山王』（博文館、明治36年）の「はしがき」で、「伝奇小説」を次のように説明している。

伝奇小説とは英語の Romantic Novel にして、写実小説とは大に其趣を異にす、即ち局面の変化に重きを置き、魔界あり、英雄、美女、妖怪、奇人、何んでも構はずドシドシ飛出す故に、純粋の文学的趣味は何処かへ逃げて仕舞ふと雖も、其代り千変万化の活劇は時に読者諸君を驚かすものあらん、

春浪にとっては、〈冒険小説〉はロマンスであったことがうかがえる。ただし、『少女世界』に掲載された〈冒険小説〉では、〈お伽小説〉のように、擬人化されたキャラクターが登場することはなく、異界を冒険するような展開も認められなかった。したがって、〈お伽小説〉に比べれば、〈冒険小説〉は「尋常世界」を描いていたといえる。

ちなみに、春浪は「少女冒険譚」の連載を開始するにあたって、次のような前口上を述べていた。

何か少女に関する冒険譚をやれと云はれる、之れには頗る閉口しました。元来女は温和しいのが天性で、好んで冒険などをすべきものでは無い、餘り飛んだり跳ねたりすると、お転婆など、云ふ可笑な綽名を頂戴する、然し女でも、この波風荒き世の中に生活して居る以上は、何時如何なる危難が起つて来るかも知れぬ、其時たゞ温和しいばかりで、腰を抜かして仕舞ふ様では仕方が無い、何も好んで冒険をする必要は無いが、いざと云ふ場合には、戦争でも冒険でもする丈けの勇気を持つて居つて貰ひたい。／之れからお話しする桂ゆき子の冒険譚、世の少女の模範になる事だと思ふのです。（１巻

２号、明治39年10月）

有事の際に限って「冒険」を認めるというスタンスは小波と笠峰と同じであるが、冒険小説作家として活躍していた春浪でさえ「閉口」するくらい、「冒険少女」を造形することが難しかったことがうかがえる。

（２）〈冒険小説〉における「冒険少女」の分析

ここでは、良妻賢母規範の観点から「冒険少女」を分析する。分析に際しては、〈お伽小説〉と同じく、良妻賢母規範を遵守するタイプ、違反するタイプ、学習するタイプ、規範から自由なタイプに分類することとした。

その結果、遵守型が６作品（「少女冒険譚」・「女侠姫」・「三人姫君」・「露子の旅行」・「桃子嬢」・「人形の奇遇」）、違反型が０作品、学習型が１作品（「無人島の正月」）、自由型が３作品（「花傘紅筆」・「黒百合姉妹」・「漂流少女」）となった。なお、「腕輪の行衛」と「海底の女王」については、前者では少女が登場せず、後者の少女は主人公とみなしにくいものの、成人女性が良妻賢母規範からの逸脱を示していたため、違反型として分析対象に加えた。

①遵守型

「少女冒険譚」は、「雪子」という12歳の少女が初航海で遭遇した冒険を描いた物語である。「雪子」は、南洋にある「野蛮島」で先住民に囚われた父親と水夫長を救出する。

普段は「極く温和しい性質」である「雪子」であるが、初航海で嵐に遭遇しても心細さを我慢できる「男子にも勝る気象を備へた少女」であり、捕らわれた父親を発見しても、救出に直行せず、陽動のために集落に火を放つ冷静さも兼ね備えた「冒険少女」である。とりわけ、「お前のあの沈着な冒険が無かつたら、私も水夫長も生きて國へ帰る事は出来なつたのだ」（１巻４号、明治39年12月）と父親に褒められているように、「沈着な冒険」が強調されていた。

久米（2013：157）は「実際に「蛮人」を退治するのは水夫たちであり、少女の活躍は手助けにとどまっている。つまり〈必要にせまられての冒険〉であり、また最終的活躍を男性に任せた点で、「温和しい」という少女の規範から逸脱せずにすんでいる」と指摘している。

ただし、「雪子」は自ら航海を志願したり、集落に火を放ったりしており、主体的に活動する一面も有していた。

この点を確認した上で指摘したいのは、「雪子」の母親の役割である。

> 此母君は極く賢明な人で、常に雪子を誡めて云ふに、『雪子や、女は何事にも温順を尊びますが、いざと云ふ場合には、男にも負けぬ気象を持つて居らねばなりません。』と、雪子は深く此言を胸に印して居つたのです。（１巻２号、明治39年10月）

船長の父親から初航海を許される場面では、「万一の時には、阿父様のお助けをせねばなりませんよ」（同上）と諭しており、「雪子」はその通りの行動を示している。海国少女としての「雪子」の振る舞いは、賢母の教えによるところが大きく、良妻賢母規範に支えられたものであるといえる。

「三人姫君」でも、賢母の教えを守る「冒険少女」が描かれていた。

> 白妙姫は姿の美しいばかりでは無く、心も玉の様に清く美しく、お亡くなりになつた母王の遺訓を守つて、悪いと思ふ事は父王に向つても遠慮なくお諫め申し、少しも諂諛を致しませんので、高慢なる王様は、何うも夫れがお気に入らぬのです。（２巻13号、明治40年10月）

父王に疎まれた「白妙姫」は、奸臣によって国を追われるが、他国の王子を補佐し、窮地に陥った父親を救い出す。男性の補佐役として活躍する「冒険少女」であった。

「女侠姫」にも、補佐役として活躍する「冒険少女」が描かれていた。

この作品は、伯爵家の令嬢である「浪子」がイタリアの競馬大会で優勝したり、アフリカの幽霊城に幽閉された親友を救出したりするという物語である。

> 実に才色双美の姫君で、且つ凛々しき気象は男子にも負けまじと武術を励み、天性極めて義侠の心に富んで、強を挫き弱を救ふ事も毎々あるので、女侠姫と云ふ栄名をさへ得て居る由（２巻３号、明治40年２月）

「浪子」は、「義侠心」に加え、競馬大会で優勝して得た一万ドルを貧民街に寄付するなど、博愛精神に富んだ「冒険少女」として造形されていた。

「博愛」は『明治少女節用』の「少女心得」でも取り上げられていた徳目である。

> 殊に、家が貧しくて難儀をして居るものや、ながい間病気で煩つて居るものや、親も家もない孤児や、或はあはれな不具者などは、出来るだけ親切にいたはつて、よくこれを慰めなければなりませぬ。時によつては、これ等のものに対して、幾分の金銭を恵んでやつたり、衣服や食物を与へるなども、またよい方法でありませう。（16頁）

博愛精神を強調することで、「浪子」が性別役割規範から逸脱していないことを示唆していると考えられる。

実際、「浪子」は自由奔放のように見えて、性別役割分業規範を遵守していた。親友を救出するために男装までしてアフリカに単身乗り込みながら、「万事心得ました、貴方のなさる様にして随つて参りませう」（２巻８号、明治40年６月）のように、窮地を救われた日本人男性の「龍雄」の補佐に徹しているのである。

他にも、「浪子姫、あれは決して恐るべき物ではありません燐火です、燐火です、人間でも獣類でも死んで白骨となり、その白骨が夜の湿気が触れる時は、あの様な光を発する事は屡ばある事です」（同上）のように、科学的知識の点で男性に劣った存在と

して描かれていた[18]。

「露子の旅行」は、「露子」という少女が行方不明の兄を探しに、マダカスカル島を目指して航海するという物語である。

ここで注目されるのは、「露子」の兄の「敏夫」が殖産青年として設定されている点である。

> 日本國の貧乏な事を深く憂ひ、何うかして此愛する國を富ませたい、夫れには何よりも海外貿易を盛んにせねばならぬと考へたので、苦心経営して白鷗丸と云ふ一艘の汽船を造り、数年以来それに乗つて世界各國を航海して居たのです、（3巻10号、明治41年7月）

「露子」を助けた語り手もまた、「地理学」を研究するために世界各地を漫遊しており、殖産青年に連なる人物であった。

兄が残した手紙に従って、「露子」は冒険に出る。

> 御身は余の遺志を継ぎ願くは其財宝を掘出して数隻の汽船を造り、之れを余の事業の紀念として日本義勇艦隊に献ぜよ、而して猶ほ又た我身女丈夫たるの覚悟あらば、余が着目せる宝石島の大富源を開拓して、日本の国益に尽せ、（3巻11号、明治41年8月）

兄の遺志を継ぐ点で「露子」もまた、海国少女に連なるといえる。しかしながら、「露子」は、捕らわれの身となった際、自ら脱出するべく行動することはなく、道中で知り合った日本人男性に助けられるのを待つなど、受動的な「冒険少女」であった。

「桃子嬢」は、南アメリカで暮らす富豪の娘の「桃子」が邸宅に押し入った強盗に同情を示し、改心させるという物語である。

冒険的展開に乏しいが、強盗に入られても、「学校」での「教え」を思い出し、冷静沈着に対応する様子がクローズアップされている。続編の「人形の奇遇」では、18歳になった「桃子」が誘拐されるのだが（良妻賢母規範を違反した訳ではない）、相変わらず、「恐れず騒がず気を沈着けて」いた。

> エミヤ嬢は勝気な女性の事とて、唯だもう口惜しく、此様な目に遭ふ程なら、寧ろ死んだ方が宜いと身を震はせて泣いて居ります。／桃子嬢は最早何事も運命と諦めて、天には偉大な力がある、如何なる危難に遭遇しても、助かる時には助かるであらう、もし忍ぶ事の出来ぬ汚辱を蒙る場合には、其時こそ潔よく最後を遂げやうと覚悟を定めましたので、恐れず騒がず気を沈着けて居りますが、（略）（6巻15号、明治44年11月）

実のところ、「桃子」が救出されるのは身投げした「エミヤ」が九死に一生を得て助けを呼んだからであって、「エミヤ」こそが「冒険少女」のように振る舞っていた。しかしながら、この作品では、「エミヤ」は短慮な少女としてネガティブに描かれており、「桃子」の「沈着」が強調されていた点が注目される。

「少女冒険譚」の「雪子」にも認められた「沈着な冒険」というモチーフは、「エミヤ」のように暴走しかねない「冒険少女」を良妻賢母規範の圏域に留めておく役割を果たしていたと考えられる。

冷静沈着である点は「少女冒険譚」の「雪子」と同じだが、「桃子」の性質としてクローズアップされているのは同情心であった。

> 「阿父様、阿母様、此人は一時過つて邪道に入りましたが、決して本心からの悪人ではありません、ルイズと云う憐れな娘の愛に曳かされて心にもなく今夜の様な事をしましたので、今は本当に後悔して居りますから、どうか此儘許して遣つて下さいませんか。」と云へば、今迄黙念と腕拱いて聴いて居つた上村紳士（「桃子」の父親、引用者注）の顔には、見る見る喜びの色が輝いて、／「オヽ、桃子、お前はよく此様な場合にも沈着いて大人も及ばぬ善い事をしました、お前の誠心で此人が善心に立帰れば、人間一人を助けたと云ふものです」（6巻12号、明治44年9月）

この場面の直前では、「慈善事業」のためにお小遣いを倹約して貯めた50ドルを強盗に恵もうとする様子が描かれるなど、「女侠姫」の「浪子」以上に、「清く温かな愛情」のある「冒険少女」として描かれていた。なお、「桃子」の父親も、「露子」の兄と同じく、国益のため、海外で殖産に励んでいる。

②学習型

「無人島の正月」は、継母による虐待に耐えかねて家出した姉妹が無人島でサバイバルする物語である。「冒険少女」は姉の「濱子」の方で、無人島に「悪魔」が棲むという迷信を怖がらず、妹を保護しながら無人島を探検していた。迷信を怖れない点は、〈お伽小説〉で検討した「火借の森」の「露子」と同じである。

この作品では、家出する「冒険少女」が罰せられていない。ラストでは実父によって救出されており、無人島では盗賊の宝まで得ている。二人の行為は、継母からの逃走であり、「家の娘」という規範を揺るがさないため、罰せられなかったのだと考えられる。

「阿母さんに睨まれながら、家でお雑煮を祝ふより、斯うして二人で食べた方が美甘しいわねえ」（3巻1号、明治41年1月）という「濱子」の科白からもうかがえるように、和楽とは無縁であった姉妹が「楽しい家庭」を得ている。「家庭」の和楽を維持するのは良妻賢母の務めであることから、「家庭」の和楽の獲得という点で学習型のバリエーションとして位置付けた。

ちなみに、この姉妹は、盗品を売って得たお金を孤児院に寄付している。このような博愛精神は「女侠姫」や「桃子嬢」に認められる婦徳であり、「冒険少女」が良妻賢母規範を遵守していることを示すマーカーとなっていると思われる。

③自由型

まずは、「黒百合姉妹」であるが、日本で誘拐され、アフリカにまで連れてこられた「百合姫姉妹」が自らの力で脱出するという物語である。

この作品で注目されるのは、「葉村」という同伴者の人物造形

である。「葉村」は「新聞記者に似合はず頗る気の弱い男」（３巻７号、明治41年５月）である。たとえば、「百合姉妹」を救出するつもりが、「到底姫姉妹には敵ひさうも無いと、茫然たる中にも姫達の武勇の程に感じ入つて、暫時は我身を忘れて居た」（３巻８号、明治41年６月）とある。

一方、「百合姫姉妹」は、敵を倒し、端艇や駝鳥を調達するなど、行動力あふれる姉妹として描かれていた。

> 下は洋装、手には白鞘の短刀！　ヒラリと抜いて、きつと身構へ、先づ血祭りとして手近に居る一人の素首丁と反ねた。（同上）

「強い美人と弱い新聞記者」（同上）という対比が際立っており、性別役割分業規範を転覆しかねない作品であった。

次に、「漂流少女」であるが、忠犬に助けられながら「フヰヂー群島」でサバイバルする13歳の英国少女の「カロン」が「蛮人」と戦うという物語である。

「カロン」は漂着した際に腰を怪我しており、大亀の背に乗って移動することを余儀なくされているため、罠を仕掛けるなどの「智恵」を駆使して、「食人種」と戦っていた。約言すれば、「勇気と奇智とに富んだ少女が、蛮人と戦ふた大奇談」（５巻７号、明治43年５月）となる。

偶然、居合わせた日本人男性の駿吉が助力するものの、あまり役に立っておらず、「黒百合姉妹」ほどではないにせよ、性別役割分業規範から自由な「冒険少女」であるといえる。

最後に、「花傘紅筆」であるが、13歳で世界一周を成し遂げた伯爵家の令嬢である「勇子」の冒険談で、「シヤスタ山麓」に置き去りにされた日本の少女を救出した時の様子が語られている。

「全世界の隅々まで姫の名は轟いて居る」（３巻５号、明治41年４月）とあり、知名度では「女侠姫」の「浪子」や「黒百合姉妹」の「百合姉妹」を凌駕しそうな「冒険少女」である。「シヤスタ山麓」での活躍ぶりは「百合姉妹」を彷彿させるものであった。

この作品で特筆すべきは、世界一周から帰国した「勇子」が記者会見の席上で「文学青年」の新聞記者に語った冒険談という体裁を取っている点である。

〈冒険小説〉には12作品のうち６作品で体験談を報告するというスタイルが認められるのだが[19]、「花傘紅筆」を除いた作品では「冒険少女」に同伴した男性が語り手となっていた[20]。

> 今、私は亜弗利加内地の、英領と仏領との境、チャッド湖中の一小島に幽閉されて居て、如何することも出来ないのです、幸ひにして鉛筆と手帳だけは悪魔に奪ひ去られずに隠袋の底に残つて居たので、世の中には斯様な不思議な秘密境があつて、其処に百合姫姉妹が無事に生存して居ると云うことを、日本の人に知らせたいばつかりに書き綴つた此文、（略）（「黒百合姉妹」３巻７号、明治41年５月）

物語内容の水準では性別役割分業規範を揺るがすような「百合姉妹」ですらも、物語行為の水準では語り手としての地位を占めることができていないのである。

「花傘紅筆」では、語り手のポジションは青年記者が占めていたものの、「勇子」は冒険談の提供者の位置を占めている点で語られる対象から脱却した「冒険少女」であるといえる。

④違反型

まずは、「腕環の行衛」であるが、日本人男性の「私」が「魔女」と呼ばれている「女賊」の逮捕劇に一役買うという物語である。

この作品では、「冒険少女」が登場しない代わりに、社会的に逸脱した成人女性が「魔女」として描かれていた。

> 此女は既に四十前後の婆さんの癖に、交際社会にチヤホヤ持囃されたいとの虚栄心を起し、頻りに化相術や美顔術を施し、巧みに紅粉を粧つて、今日まで若い美しい女に化けて居たに相違ない、（５巻９号、明治43年７月）

「虚栄心」がクローズアップされるなど、良妻賢母規範からの逸脱が強調され、そのような堕落女性を社会的に排除する男性的まなざしが認められる。

次に、「海底の女王」であるが、元海賊の「龍王」という女船長が潜水艦を駆り、「浪路」という少女を救い出し、戦死した父親の亡骸と対面させるという物語である。

道具立ては、ナショナリズムを想起させるが、「妾達は、日本人に相違ありませんが、仔細あつて、日本の國に籍の無い者で、某国の人に成つて居ります」（３巻10号、明治41年７月）とあるように、「日本」に帰属している訳ではない。しかも、元海賊の女船長を筆頭に、船員が元負傷兵であるなど、乗組員はアウトロー集団であった。日英同盟が背景的要因として指摘できるものの、「虐待」されていたのを助け出された「浪路」が日本ではなく英国に預けられているなど、ナショナリズムに揺らぎが認められる作品であった。

なお、「魔法でも、幻術でもありません。科学の力を以て妾は貴女を阿父様にお会はせ申しますから、是非一所に入らッしやいまし」（同上）のように、『少女世界』には珍しく、「科学」がクローズップされた〈冒険小説〉であった。

５．考察と課題

まずは、掲載状況であるが、〈お伽小説〉が46件・12作品、〈冒険小説〉が55件・12作品であった。１巻当たりの掲載件数は、〈お伽小説〉が約6.5件（小数点第二位以下は切り捨て、以下同じ）、〈冒険小説〉が約7.8件で、両ジャンル間に差は認められなかった。

目黒（2012）によれば、『少女世界』に掲載された〈少女小説〉が120件・101作品であるので、両ジャンルは〈少女小説〉ほど掲載されていた訳ではないが、「冒険少女」という当時にしては新しい少女が登場するジャンルであることを踏まえるならば、少なくはないと考える。

次に、掲載作家であるが、それぞれのジャンルを手がけた作家に顕著な違いが認められた。〈お伽小説〉では12作品のうち10作

品を巖谷小波が占め、〈冒険小説〉では押川春浪が12作品のうち７作品を占めており、特定の作家との結び付きが強いジャンルであった。ちなみに、目黒（2012）によれば、沼田笠峰は『少女世界』で〈少女小説〉を19件・18作品手がけており、登場頻度は西村渚山に次いで二位であった。

掲載作家については、小波は〈冒険小説〉と〈少女小説〉を手がけておらず、春浪は〈お伽小説〉と〈少女小説〉を手がけておらず、笠峰は〈お伽小説〉と〈冒険小説〉を手がけていないというジャンルの棲み分けが認められた。このことは、ジャンルの傾向と作家の傾向を弁別することを困難にしている。両者を弁別した上で、ジャンルの傾向を明らかにすることは今後の課題である。

つづいて、両ジャンルのスタイルであるが、〈お伽小説〉がロマンス志向であるのに対して、〈冒険小説〉は〈お伽小説〉ほどロマンスを志向してはいなかった。さらに、両ジャンルにおける「冒険」の語られ方に相違が認められた。〈お伽小説〉では「外出失敗物語」が出現し「海洋冒険物語」が出現していなかったのに対して[21]、〈冒険小説〉では「海洋冒険物語」が出現し「外出失敗物語」が出現していなかった。

ここで注目されるのは、「三人姫君」・「腕環の行衛」・「桃子嬢」を除いた９作品の〈冒険小説〉で、少女が海を越えて冒険する姿が描かれていた点である。

高橋（2015）によれば、日清戦争前後においては「国民の半分を占めているはずの女性は、「海国女児」あるいは「海国少女」として述べ立てられることはない」（307頁）というが、明治40年代には「冒険少女」が海洋冒険小説に進出を遂げていたことが明らかとなった[22]。ただし、「国益」のために冒険する「海国少女」は例外的で、誘拐された友達や家族・親族などを助けるために「やむをえない冒険」（久米, 2013：157）をする「冒険少女」が多かった。

最後に、良妻賢母規範に対する「冒険少女」の振る舞いであるが、遵守型が９作品、違反型が０作品（成人女性の違反を除く）、学習型が６作品、自由型が４作品という結果となった。違反型がなく、遵守型が多いことから、両ジャンルは良妻賢母規範を再生産する「イデオロギー装置」（アルチュセール, 1993）であったといえる。

遵守型については、自分で機織機を製作した「ひとえ」（「八重一重」）や自ら航海に志願した「雪子」（「少女冒険譚」）、幽霊城に単身乗り込んだ男装の麗人の「浪子」（「女侠姫」）などのように、良妻賢母規範の圏内で主体的に振る舞う「冒険少女」が散見された。「勇気」という婦徳が「非常時」において許されていたように[23]、このタイプの「冒険少女」は良妻賢母規範に従うことにより主体的に振る舞う「服従する主体」[24]である。彼女たちには「裁縫」や「沈着」、「博愛」などの婦徳が付与され、良妻賢母規範からの逸脱が制御されていたことからも支持されよう。

学習型については、〈お伽小説〉において良妻賢母規範に違反した「冒険少女」が矯正される作品が５本認められた。久米（2013）が『少年世界』に指摘した「外出失敗物語」というパターンが『少女世界』にも現れていたことが明らかとなったが、〈冒険小説〉には出現していなかった。このことは、「外出失敗物語」が「家」の周囲で展開される〈お伽小説〉と親和的であることを示唆している。

自由型については、良妻賢母規範から自由な「露子」（「火借の森」）や性別役割分業規範から自由な「百合姉妹」（「黒百合姉妹」）、「勇気」と「奇智」に富んだ「カロン」（「漂流少女」）が描かれていた。このような「冒険少女」は、『少女世界』が課外読み物として規制される危険性を孕んでいたと考えられる。

ただし、良妻賢母規範から自由な「冒険少女」でさえも、自らの冒険を自らの声で語る機会は獲得していなかった。〈冒険小説〉に認められた同伴男性による語りは、「冒険少女」を物語行為の水準で制御し所有する行為に他ならない[25]。このような語りにより、良妻賢母規範から逸脱する「冒険少女」は制御可能な対象へと回収されたのだと考えられる。

総じていうならば、『少女世界』における「冒険少女」は、学習型の作品に顕在化していたように、良妻賢母規範の圏内に回収されていたといえるが、自由型の作品をはじめ、遵守型の作品にすらも、良妻賢母規範との緊張関係が認められた。

巖谷小波・沼田笠峰・押川春浪の「冒険少女」観を踏まえるならば、作品に看取された緊張関係は、それぞれの作家が意図したものであるというよりも、「冒険少女」そのものに内在していた良妻賢母規範の転覆可能性が発露するという「意図せざる結果」であったと考えられる。

「冒険少女」が登場する〈お伽小説〉と〈冒険小説〉に着目することにより、『少女世界』が良妻賢母規範を再生産する雑誌でありつつも、編集者や作家の意図を超えて良妻賢母規範から逸脱する潜在性を孕んだ雑誌であったことを明らかにできた。その限りではあるが、課外読み物規制の網の目をかいくぐり、少女読者が「冒険」を「空想」する機会を提供した最初期の雑誌として『少女世界』を評価することができよう。

なお、本稿では、紙幅の都合、『少年世界』との比較、『少女界』などの他誌との比較ができなかったので、今後の課題としたい。

【注】

1）女学校名は不明。

2）雑誌を読む少女読者を戒めるような記事を掲載することにより、『少女世界』は警戒されるような雑誌ではないというメタ・メッセージを伝えていると考えられる。

3）明治39年６月の訓令第一号「学生生徒ノ風紀振粛ニ関スル件」にはじまり、明治44年５月の通俗教育調査委員会設置により、課外読み物規制は制度的完成をみる。詳しくは、目黒（2014）を参照されたい。

4）引用は、中鳶邦監修（1984）に拠る。

5）小波と笠峰以外に木村小舟と竹貫佳水が編者を務めているのだが、分担執筆者が記載されていないため、該当記事の筆者は不明。

6）「八重一重」の角書は「お伽少女小説」と「お伽小説」が各一回、「鶯塚」の角書は「少女お伽小説」（本文）と「お伽小説」（目次）が混在していた。

7）引用は、岩波文庫版（2010年改版）に拠る。

8）産婆が活躍する「みどり艸紙」では産む性としての母性が描かれ、「雁の礫」では罪人を改心させる成人女性（母親）の

慈悲深さが描かれるなど、良妻賢母規範が強調されていた。

9）同じく裁縫嫌いの「冒険少女」が登場する作品として、若松賤子「着物の生る木」(『少年世界』1巻18号、明治28年9月）が挙げられる。『少年世界』の「少女」欄に掲載された同作品には、「物語内容としてはあくまで婦徳の尊重に収斂するが、それを語る過程で非日常的夢想世界へと、読者の少女を誘い出す」という二律背反的な構造が仕組まれているという（久米, 2013：90)。良妻賢母規範をめぐる「冒険少女」の揺らぎは「無縫の衣」と「八重一重」の対照的な少女像にも指摘できよう。

10）女学生批判については、稲垣（2007）を参照されたい。

11）人魚であるため、「小安手」の挿絵が半裸体となっており、裸体画論争を想起させる点で、課外読み物規制に抵触する表現であると考える。裸体画論争については、中山（2000）を参照のこと。

12）「冷却」とは「既成の文化目標を変換し、アスピレーションそのものを低下させること」（竹内, 1988：166）で、ここでは、立身出世という文化目標を達成できない人々の失意をガス抜きする機能を指す。『少女世界』における「少女小説」には、このタイプの作品が散見される（目黒, 2012)。

13）蔡（2010）は小波が渡独した際に見聞した西洋婦人の影響を推測している。

14）久米（2013：103）によれば、「物語が示している無許可外出への厳しい禁止は、それが「家の娘」の最大の逸脱－自己の意思決定による行動－を意味したからだ」という。

15）「探検小説」は「海底の女王」のみ。なお、「冒険小説」については、角書がない号があったり、「腕環の行衛」のように「冒険奇談」と「冒険小説」が混在していたりしているため、目次ないし本文のタイトルで一度でも「冒険小説」ないしは「探検小説」という語が含まれている作品を抽出した。

16）岡村直吉の調査によれば、春浪と水蔭と櫻井鷗村が児童によく読まれている冒険小説作家であったという（「児童課外読物につきて」『教育学術界』23巻2号、明治44年5月)。

17）〈冒険小説〉はノベルとロマンスの間で揺らいでいたジャンルであった。詳しくは、目黒（2016）を参照のこと。

18）蔡（2010）によれば、科学的知識による解決は少年を主人公とした「異界往還型物語」に認められるという。

19）〈冒険小説〉における事実性を仮構した語りの意義については稿を改めて検討したい。

20）ただし、「漂流少女」の語り手は、「冒険少女」に同伴した駿吉ではなく、駿吉から伝え聞いた者であるが、「冒険少女」が情報提供者たりえていない点に変わりはないことから、ここでカウントした。

21）小波は『少年世界』（4巻、明治31年）に「新八犬伝」という「お伽小説」を書いているのだが、その内容は「海洋冒険物語」である。このことは、「お伽小説」で「海洋冒険物語」を書くことができない訳ではないことを示唆している。

22）南進論の影響もあって、〈冒険小説〉では「南洋」を舞台とした作品が散見された（「少女冒険譚」など)。このような〈冒険小説〉は課外読み物として警戒されたかも知れない。『現代少女とその教育』では、「空想の翼をひろげて華やかなもの」を求める「空想型」の少女に教育者の注意を喚起する件で、「思慕の対象」として「オレンヂ美しき南の國」「椰子の葉しげる南洋の港」が挙げられているからである。

23）若桑（2000：256）によれば、「伝統的な男女枠内」にとどまっている限り、「女性の強さは非常時においてはむしろ積極的に要求される」という。

24）「服従する主体」については、アルチュセール（1993）を参照されたい。

25）「花の様な日本の一美人」(「女侠姫」）や「絶世の美人」(「黒百合姉妹」）のように、「冒険少女」が「美人」として語られていることも、男性の語り手が「冒険少女」を所有していることを示唆している。

【文献】

アルチュセール、ルイ（1993）柳内隆訳「イデオロギーと国家のイデオロギー装置」『アルチュセールの〈イデオロギー〉論』三交社

稲垣恭子（2007）『女学校と女学生　教養・たしなみ・モダン文化』中公新書

今田絵里香（2007）『「少女」の社会史』勁草書房

久米依子（2013）『少女小説の生成　ジェンダー・ポリティクスの世紀』青弓社

小山静子（1991）『良妻賢母という規範』勁草書房

蔡暉映（2010）「巖谷小波の創作「お伽小説」－異界往還物語からみる「少年」と「少女」－」日本児童文学学会編『児童文学研究』43号

高橋修（2015）『明治の翻訳ディスクール－坪内逍遥・森田思軒・若松賤子』ひつじ書房

竹内洋（1988）『選抜社会』リクルート出版

坪内逍遥（2010）『小説神髄』岩波文庫

中鳶邦監修（1984）『近代日本女子教育文献集15　現代少女とその教育』日本図書センター

中山昭彦（2000）「裸体画・裸体・日本人－明治期〈裸体画論争〉第一章－」金子明雄ほか編『ディスクールの帝国　明治三〇年代の文化研究』新曜社

目黒強（2010）「『少年世界』における「お伽小説」にみる「小説」の位相－巖谷小波の作品を中心として－」『国際児童文学館紀要』23号、

目黒強（2012）「メディア有害論からみた『少女世界』における女学生像－「少女小説」と「演劇」を中心として－」『国際児童文学館紀要』25号

目黒強（2014）「明治後期における課外読み物観の形成過程－『太陽』における「小説」観に着目して－」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』8巻1号

目黒強（2016）「明治期における〈冒険小説〉の排除と包摂－教育雑誌を中心に－」大阪国際児童文学振興財団『研究紀要』29号

若桑みどり（2000）『戦争がつくる女性像　第二次世界大戦下の日本女性動員の視覚的プロパガンダ』ちくま学芸文庫

（付記）資料からの引用に際しては、適宜、旧字を新字に改め、ルビを省略し、横書きで表記できない踊り字（二の字点・くの字点）については該当文字を起こした。